



小特集：センター試験リスニングテスト初実施

教室でもこれだけできる リスニングテスト対策

向後秀明



■リスニングは大胆かつ繊細に

長年にわたる議論・準備を経て、ついにセンター試験にリスニングテストが導入された。今は、“大騒ぎの後の静けさ”といった感じだろうか。勤務校の生徒に受験後の感想を聞いてみたが、プレテストに触れていた彼女らは、その第2弾とも言える同形式・同レベルの問題に大きな戸惑いはなかったようである。しかし、以下のように周辺のことを言ってきた生徒が多かった。

- ・どの音量が聞きやすいかを決めるのに迷った。
 - ・隣の人の音量が大きすぎて、イヤホンから音が漏れていたのが気になって仕方なかった。
 - ・筆記試験で解答に迷った問題のことを思い出してしまい、リスニング中に気がそぞろになった。
- なるほど、である。リスニングテストは30分であり、この間ずっと集中力を持続させなくてはならない。そうかと言って、神経質になればなるほど、いろいろなことが気になり出す。リスニングテストでは「予想外のことが起きるかもしれない」という心構えで臨むぐらいの大胆さと、いったん音声の流れたら各問題のポイントを聞き逃さないという繊細さの両方をもっていた方がいい。

■やっておきたい“センター式リスニング”対策

予想通りリスニングテストには、テストデザインにおいていくつかの特徴が見られた。それを理解しておくかどうか（生徒に指導しておくかどうか）で、結果が大きく左右される可能性もある。

① 特徴 問題冊子に質問と選択肢あり

⇒ 対策 質問&選択肢の速読トレーニング

音声の流れる前に質問だけでも見ておけば、聞き取るべきポイントを絞ることができてかなり有利になる。これは簡単なことのように思われるかもしれないが、実は速読力や eye span とも関係があり、トレーニングが必要である。選択肢の読解をしているうちに次の問題が聞こえてきた、などという事態は避けてはならない。同形式のリスニングテストを使って、“質問&選択肢10秒内リーディング”といった対策をしておきたい。

② 特徴 聞き取る英語は2回聞き

⇒ 対策 1回聞きでトレーニング

これには少々驚いたが、25問のすべてを2回ずつ聞くことができる。〈質問内容の把握 → 1回目のリスニングで正解予想 → 2回目のリスニングで確認〉という流れが基本となるだろうが、逆に英検準2級・2級のような一発勝負に慣れておき、実際の試験を楽だと感じさせるという手もある。

③ 特徴 複数の情報を総合して聞き取る問題

⇒ 対策 メモ書きで情報整理

いくつかの情報をまとめて理解することが要求されるような問題に対して、聞きながら素早くメモをとる技術も大きな助けとなる。例えば第1問の間3では、質問と選択肢のイラストを見れば、机の上にあるコンピュータと本の配置を聞き取る問題であることがすぐにわかる。メモ書きに慣れていれば、このリスニングは c → l, bs → r の5文字 (c: computer, l: left, bs: books, r: right) で対処できる。授業では、音声を流しながら教師が黒板にメモ書きの例を示し、“乱雑でも的確な”メモがとれるように指導しておくといよい。

■すべての科目で“英語耳”を養成

多くの高校では、1年次に「英語Ⅰ」と「O.C.Ⅰ」、2・3年次で「英語Ⅱ」「ライティング」「リーディング」を組み合わせたカリキュラムを作っていると思われる。そこで起こりがちなのが、英語を聞いたり話したりする活動を「O.C.Ⅰ」で集中的に行い、それ以降は読解や語法・文法の理解を中心とした“視覚偏重型授業”を卒業まで続けていくという現象である。そのような状況に、センター試験のリスニングテストが一石を投じたことは確かである。運動部に所属している生徒が怪我などで練習を休むと、元の状態へ戻すまでには休んだ期間の倍近くかかると言われる。“英語耳”の状態を保つのも同様で、英語を頻繁に聞いていたのは受験の2年前までというのでは、取り返しがつかない。どの科目でも、英語を音声としてとらえる機会が与えられなくてはならない。

■リスニングの試験対策は初見の英文で

今やどの科目のどの教科書にも、CDがついている。これを使って、文字と音声を結び付けるような指導は必要であろう。しかし、例えば「英語Ⅰ」のテキストを使って listening comprehension の練習をしても、予習をしてきた生徒はすでに英文に目を通しており、理解度を測るという点では機能しない。センター試験も考慮するなら、初見の英文を用いるべきである。学習する題材内容に関連した素材があれば授業とのリンクもスムーズにいくのだが、その音声版を探すのは容易ではない。思い切って教科書の内容から離れ、別リスニング教材を使って練習することを考えてもいいのではないだろうか。実際、授業の最初に“Warm-up Listening”として、英検の過去問などを利用している先生方も多いであろう。

■聞けないものは何度聞いても…

リスニングの後の comprehension check で正解が得られないと、繰り返し何度も聞かせる――

これは生徒にとって“苦行”でしかない。聞き取ることができないのには原因があるはずで、それを追求しない限り日本のような EFL 環境下では特に、いつの間にか聞けるようになったということは起こりづらい。聞き取れない原因としては、例えば次のようなことが考えられる。

- ・未知語が多すぎて、全体像がつかめない。
- ・既習語彙なのに、実際の音が自分の頭の中で内在化している音と異なる、あるいは連結や脱落等による音変化によって認識できない。
- ・場面に関するスキーマが乏しく、聞いている内容を頭の中で visualize できない。

授業でリスニングを扱う場合はテスト形式だけでなく、原因分析に基づいて、聞けるようになるまでのプロセスを指導していくことが大切である。

■センス・グループごとに“直聴直訳”

英語の授業以外は生活のほとんどを日本語で済ませることができる生徒に、直聴直訳の考え方を振りかざしても「ハー？」と言われるだけである。英語を理解する過程で、母国語が多かれ少なかれ介在することは避けられない。むしろそれを逆手にとって、母国語を利用してリスニング練習する方法もある。その一つとして、センス・グループごとに音声を止め、その部分を聞いた順番に、必要最小限の日本語で置き換えていく“直聴直訳”方式を私は授業で実践している。センター試験のリスニングテスト Question No. 20 の中の一文を例にとると、次のようになる。

There are direct flights (直行便あり)/ to Amsterdam, (アムステルダムへ)/ where she lives, (彼女が住んでる)/ but I wanted to see France and Italy as well (見たい, フランス・イタリアも), so I caught a plane (飛行機に乗った)/ to Paris. (パリへ)

このような練習をふだんから行っていれば、授業内の学習だけで十分に対応できるテストである。

(こうご ひであき・千葉県立千葉女子高等学校教諭)